

太宰府・大野城・水城を巡る

編 集 部

平成二十七年年度の第一回現地研修会は二月二十六日に実施され、福岡県の九州国立博物館と太宰府、古代の城郭である大野城、防御施設の一つ水城を廻った。

朝八時四十五分、佐伯南部振興局前を出発した私たちは、一路、福岡に向けバスを走らせた。今回の参加者は二十一名。車中で、いつもの通り會長さんの挨拶、今日の日程についてのお話があった。

九州国立博物館では現在「古代日本と百済の交流展」が行われている。この中には是非見てほしいものがあるという。【七支刀】（七枝刀）である。

この刀は、三百七十二年（神功四十七年）、物部氏が百濟より戴き、石上神社に奉納したものである。また、太宰府の裏山にある大野城と水城は、新羅・唐の連合軍に敗れた日本が、防衛の為に造った古代の城であるという。当

時の状況を踏まえ学習して欲しいとのことであった。

一、国立九州歴史博物館

現在行われている「古代日本と百済の交流展」は、日本と百済の関係を知る良い機会である。

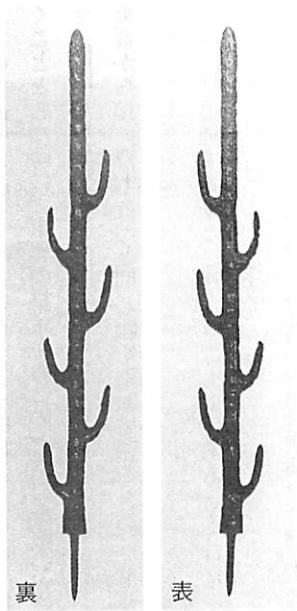
今から一六〇〇余年前、日本は河内王朝の時代で大和朝廷による国土統一が進んでいた。これ以前の日本では卑弥呼や倭の五王が中国や朝鮮の進んだ文化を取り入れるため海外に進出していたという記録がある。

四世紀頃、日本は朝鮮半島に進出し、当時の三韓、新羅、百済、高句麗と交流していた。南部に加羅という地域があり、そこに拠点として任那日本府を形成したのもこの頃である。

しかし、北方の高句麗に広開土王が現れ新たな土地を求めて南下、新羅・百済を圧迫してきた。そのため新羅、百済は中国（東晋）或いは倭国（日本）を後ろ盾に戦いを押し進めていた。

このような時代、倭国の中心となったのは大伴氏であり物部氏であった。西暦三七二年、百済王朝から日本の朝廷に七支刀が送られてきた。友好の証である。

この七支刀は、先に述べたように石上神宮に奉納されている。日本書紀によるとこの石上神宮は大和朝廷の武器庫があったところとされており、「石上神宮に刀剣千口を納めた」などの記載がある。大和朝廷の軍事面の責任者が物部氏で石上神宮を本拠地としていたようである。この七支刀は全長七四・九センチメートル、刀身の部分は六十五センチメートルある。刀身から左右に三つずつ互い違いに枝が出ている。刀身の先の部分を合わせて七つの支刀が出ているので七支刀と呼ばれている。



この七支刀の両面には金象嵌で文字が書かれている。

明治時代に菅政友大宮司がこの文字の所在を明らかにし、それ以後多くの研究者が解説に挑戦している。

今回の展示では、浜田耕作氏の見解を提示している。

《釈文》

表 泰和四年五月十六日丙午正陽造百練□七支刀出辟

百兵宜供候王永年大吉祥

裏 先世以来未有此刀百濟王世□奇生聖音（又は晋）

故為倭王旨造傳示後世

《現在語訳》浜田耕作氏見解

表 泰和四年五月十六日丙午の正陽の時刻に百たび練

った□の七支刀を造った。この刀は出でては百兵を避ける事が出来る。まことに恭恭たる候王が佩びるに宜しい。永年にわたり大吉祥であれ。

泰和□中国東晋の年号 太和 三六九年

正陽□日中の気 六気の一つ 日中のこと

恭恭□うやうやしいさま

裏 先世以来、未だこのような（形の、また、それ故にも百兵を避けることのできる呪力が強い）刀は（百濟には）なかった。百濟王と世子は生を聖なる晋の皇帝に寄せることとした。それ故に、東晋皇帝が百濟王に賜われた「旨」を倭王と共有しようとする刀を（仿製して）「造」った。後世にも永くこの刀（と

これに秘められた東晋皇帝の旨を伝え示されんことを。

この文面からみると、百済は東晋に随属し其の元で働くこととした時に、東晋の皇帝からこの七支刀を戴いた。今、倭国と供に敵対する国を討とうと思う。その証として東晋から頂いた七支刀と同じ物を作って送るといいう意味だと説明している。

倭国に追隨する証とし送られたものである。それから百数十年。百済は王都を侵攻され滅亡の危機に瀕した。しかし、武寧王ぶねいおうの時、勢力を盛り返し逆に新羅を圧倒する。のち百済が新羅・唐の連合軍に敗れた。その後は、倭国に滞在中の百済の王子豊璋ほうしょうが母国復興のため、倭国より帰朝しゲリラ戦を展開する。その戦いの中で倭国の出先機関であった任那日本府にんなにっぽんぷ（加羅）が五六二年新羅に亡ぼされた。百済復興を自途とする王子豊璋に六六三年三月日本からの援軍二万七千人を送り、ともに唐・新羅軍と戦う。八月白村江はくそんこうで百済・倭国軍は唐・新羅軍と戦い敗退した。（白村江の戦いはくすきのえ）

此の戦いの後、倭国は唐・新羅連合軍の攻撃を防ぐ為

大野城・基肄城・水城などの防御施設を造った。
《白村江の戦い》

蘇我氏の勢力を大化の改新で打ち破った中大兄皇子（天智天皇）は、六六二年大軍を百済に送り助けようとしてます。翌六六三年八月二十八・二十九日の二日間、百済・日本の連合軍は新羅・唐の連合軍と戦い壊滅します。中国の歴史書には「四百艘の船が燃え上がり、煙は天を覆い海を血で赤く染めた。」と書かれている。

倭国は侵攻を防ぐ為、大野城等の防護施設を作るが、新羅軍は高句麗軍との戦いのため侵攻はなかった。



二、大野城址（中央に水城の堤防が見える）

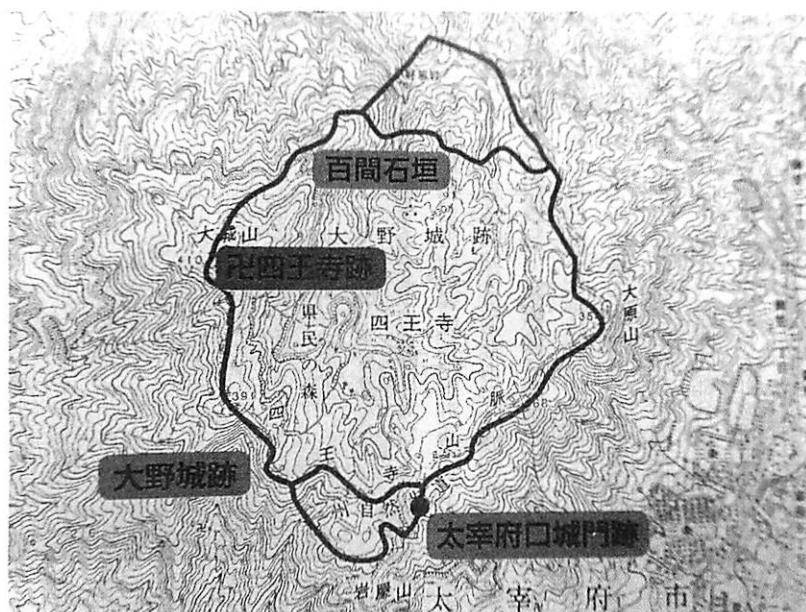


太宰府の裏山、高さ四一〇メートルの四王寺山にある大野城は、新羅・唐連合軍の攻撃を防ぐ為造られた山城である。私たちは、国立歴史博物館の視察の後、バスでこの山に登った。

四王寺山は大城山・岩屋山・水瓶山・大原山の四つの山から構成されている。白村江の戦いの後、六六三年から六六四年にかけて造られている。今から一三五一年前の事である。この大野城は百濟から亡命した憶礼福留おくりふくろと比福夫ひふくぶが中心となつて築いたという。

博多湾から上陸するであろう敵に対し、太宰府を守るために北に大野城、南に基肄城きい（岐山町基山パークینگエリア西）、東に阿志岐山城あしき（筑紫野市阿志岐）、西に水城みづき（大野城市水城）を配置した。基肄城には小水城と同規模の土塁が二ヶ所認められる。

私たちはこの大野城跡に登った。道は太宰府商店街を抜けた所にある西鉄二日駅前の路を市内と反対方向に行った左手に上り口がある。時間の都合で大野城の土塀は車中からの視察となった。この大野城付近の要害の位置と四天寺山は次の図の通りに位置づけられていた。



大野城跡（太宰府史跡マップより）

この大野城は、太宰府政庁背面の四王寺山にある朝鮮式の山城で、楕円形の尾根線上に幅約八メートル、高さ二メートルの版築土塁^{はんちく}で北側と南側は二重に巡らされている。谷の部分は石塁^{いし}で塞いでいる。土塁の総延長は八キロメートルにも及んでいる。城門跡は八ヶ所確認されている。中でも北石垣城門の唐居敷^{からいし}きには門扉の軸を受ける金具がはさまった状態で発見された。城内からは七十棟程の建物跡も発見されている。

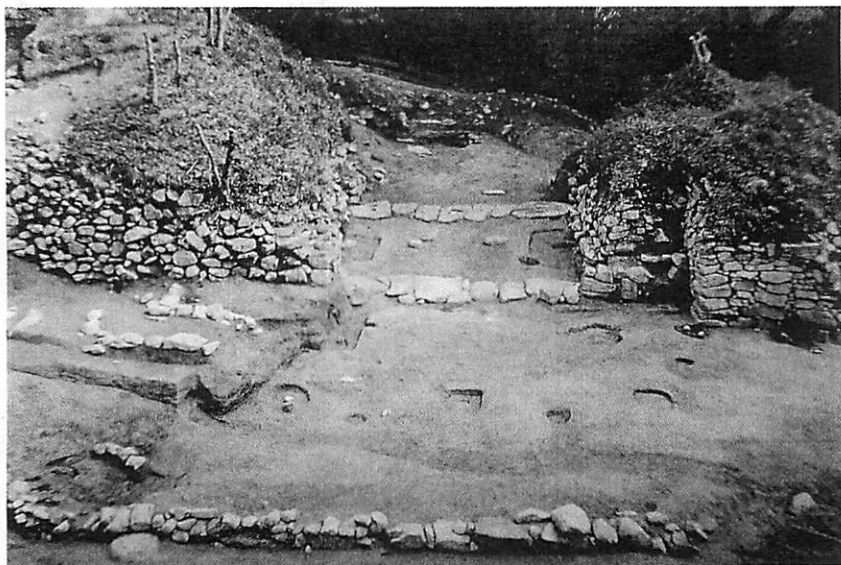
この門扉の軸受け金具は、今回の展示物の一つとして紹介されていた。重さ十二、八キログラムもある。



鉄製の軸受け金具



大野城一百間石垣



大野城太宰府口城門

この土塁は百間石垣として現在も残されている。途中まで登ってみたが、延々と石垣が続いている。この石垣の上から全貌が見えるそうだが時間の都合で、取りやめ、次の訪問地「水城」に向かった。

三、水城

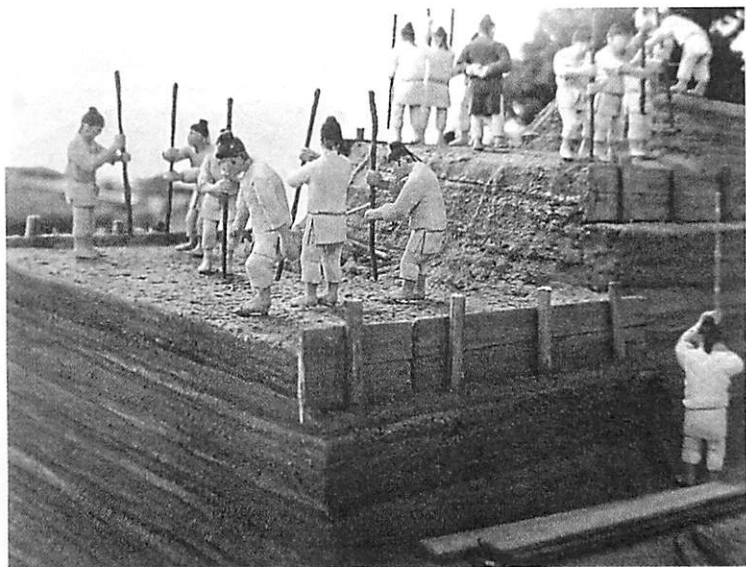
この水城は、大きな堤で福岡平野の二日市地峡帯ちきょうたいと呼ばれる山と山の間^に造られた大堤防である。

全長は一、二キロメートルある。土塁は上下二段構造になっており、底の部分に水を流す木樋が埋め込まれている。最大幅は八十メートルある（通常部分は四〇メートル）。土塁の高さは十二メートルある。

現在は、この水城の一部に九州自動車道、国道三号線、JR鹿児島本線が通り分断されている。

当時の水城は堤防の内と外を繋ぐ木製の樋みが通っており木樋を通して外側に水を送り、六〇メートル幅の水壕が造れるようにしていた。

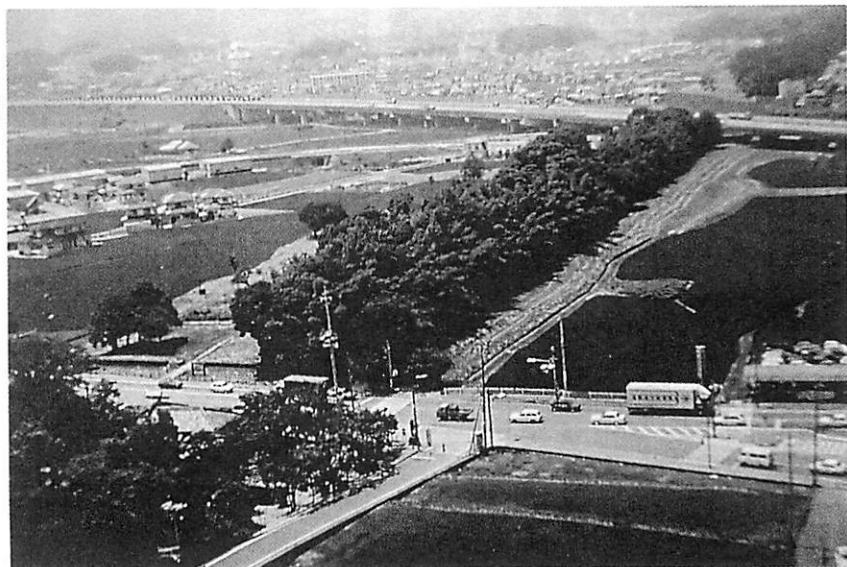
この大堤防は安定性を保つために、ぶな・しきみ・ツバキ科の植物を底に敷き詰め、堰板せきばんで枠を組み、その中に層状に土を突き固めながら盛り土した構造になっている。



る。断面をみると土が層状になっている事がわかる。
作り方を版築工法はんちくこうほうという。その復元図です。

版板を左右に築き土を置き踏み固める工法（版築工法）

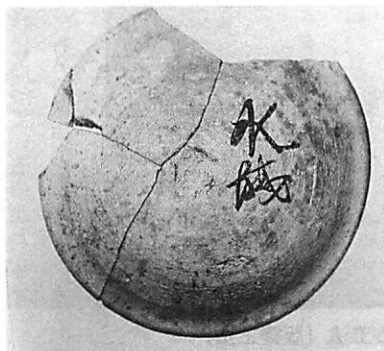
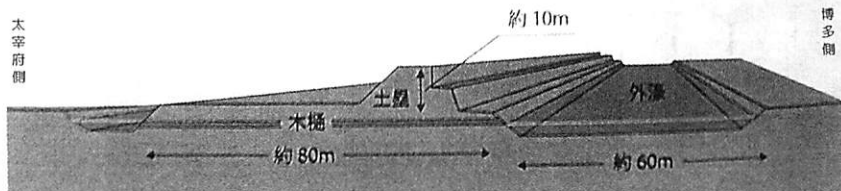
現在の水城大堤防



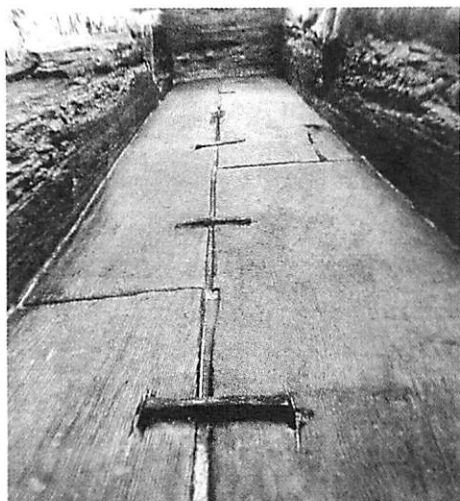
水城の断面図

南
太宰府側

北
博多側



この版築工法で造られた堤防を切ってみると、上のような図になる。
博多湾から敵が攻めてくると左手の三笠川から水を集め、木樋を通して水を流し込み外濠を造る。先ず水壕で、次に土塁で敵を防ぐ仕組みになっている。
この水城からは土器も発見されている。



水城の取水口
三笠川から水を取り入れる。

木樋の内部木を止めるのに重さ 1.6kg もの大きな「かすがい」を使用している。
一枚の板の長さは 3～6m ある。

